

『源氏物語』とよみ人しらず歌

植 田 恭 代

はじめに

『源氏物語』の世界において、和歌はひとつの主要な柱をなす。登場人物たちは折々に和歌を詠み、それぞれの場面は和歌表現を多様に取り込んで成り立っている。『源氏物語』の研究史では、作中和歌や歌語など多岐にわたって追究されてきたが、そのうち、物語に先行する時代や同時代の和歌の一節、そのことばを用いて表現する引歌は、藤原伊行『源氏釈』や藤原定家『奥入』をはじめとしてはやく古注釈の時代から注目を集め、さまざまな注釈作業や一覽作成が重ねられ、現在も関心を呼び続けるテーマである。物語と和歌それぞれの言語文化があり、両者の交流のひとつの様相が、物語世界としてある。どちらかの側に性急に引き寄せるのではなく、それぞれの層の厚さと広がり視野に入れ、物語世界と和歌のありようをゆるやかに考えてみるのが肝要であろう。

『源氏物語』の研究では、個々の物語場面を読み解く興味から引歌がとりあげられることが多いが、引かれる和歌をも配慮するひとつの観点として、よみ人しらず歌に着目して考えてみたい。勅撰和歌集に由来する歌ことばの知名度は高く、散文表現のなかで發揮さ

れるその力は大きい。三十一文字を基本とする一首は、詞書や歌題、左注など一首をとりまくことばとともにある。それらはいずれも詠歌事情を伝える役割を果たしており、作者名表記は一首の出自を表す部分として見逃せない。『源氏物語』には作者名の明記される歌ばかりが引かれるわけではなく、個人の作者名を明記しない和歌が多く引かれている。

本稿では、『源氏物語』の引歌考察の一環として、伝承性の強いよみ人しらずの和歌に光を当て、物語世界との関わりを考えてみることにしたい。

一 『源氏物語』の引歌

「引歌」には、その概念規定の問題がつきまとう。引歌研究においては、引歌をどう認定するのが、まず常に問題とされてきた。大別して広義と狭義のとらえ方があり、本居宣長は絶対にその歌に拠らなければ表現できない部分であると限定的にとらえる考え方を表し²⁾、それがむしろ引歌の対象を拡げる方へと作用してきたと言えよう。それは引歌の一覽として提供されてきた現代の成果をみても、明らかである。早い時期に出された玉上琢彌『源氏物語の引き歌』³⁾、

『源氏物語事典』所収の同氏「所引詩歌仏典」⁽⁴⁾のち、参考歌なども含み広い採択方針による伊井春樹『源氏物語引歌索引』⁽⁵⁾が出され、この『索引』にもとづくCD-ROM版⁽⁶⁾は情報処理時代の検索に不可欠の基礎資料として普及している。また、検討資料を広く提供する『引歌索引』のちに刊行された完訳日本の古典『源氏物語』所収「源氏物語引歌一覽」⁽⁷⁾は、注釈作業を反映して脚注にあげられた歌を集めたものである。一方、和歌的な表現すべてを含む「歌ことば」という概念を立てる小町谷照彦氏は、『源氏物語』の各場面を読み解かれている⁽⁸⁾。

研究者それぞれの立場から吟味した引歌一覽の作成を試みる事が可能であり、そこに独自の引歌概念が反映されることになる。

引歌として指摘される歌には、さまざまな出典がある。三代集に着眼する鈴木宏子氏は、完訳日本の古典の引歌一覽を基礎資料として調査をされている。それによれば、『古今集』歌は二百十一首、『後撰集』歌は六十七首、『拾遺集』は七十首であり、『古今集』では巻別に見ると「引歌率の高い順に、雑下、哀傷、恋四、雑上、秋上、恋一、春上と雑体……であり、もつとも引歌となる率が高い巻は雑下」であるという。また、引歌となる回数が多い和歌としては、物語中に五回以上引かれる和歌が十三首ある。その内訳は『古今集』八首、『後撰集』二首、『拾遺集』・『遍昭集』／『新古今集』・『源氏釈』所引各一首である。一首の和歌としてみると、もつとも引用回数が多いのはよく知られた『後撰集』藤原兼輔歌で、二十五回を数える。

人のおやの心はやみにあらねども子を思ふ道にまどひぬるかな

『後撰集』 雑一・一一〇二 兼輔朝臣

子どもを思う心情を一首に表した歌である。鈴木氏は「引かれや

すい歌とは、多くの人が思い当たる普遍的な心情を的確に捉えて、それを印象的な比喩やフレーズによって形象化したものであるといえよう。」と述べられ、さらに作者が兼輔という紫式部の父祖であることを、引用五回のもう一首『後撰集』藤原雅正歌（夏・二二二）とともに指摘する。鈴木氏のあげられる十三首中、紫式部の父祖に関わる歌二首以外をみると、引用七回の一首と引用五回の四首の計五首が『古今集』よみ人しらず歌である。多く引かれる歌の要件が人口に膾炙し共感を呼ぶことであれば、伝承されてきた和歌の力を見逃すことはできない。『古今六帖』所収歌、『伊勢物語』所収歌、古注釈所引の出典未詳歌、また朗詠や催馬楽、風俗歌といった歌謡のことばなど、『源氏物語』は伝承性の強い和歌のことばを、積極的に掬いあげる作品である。勅撰集入集歌には、作者記名歌ばかりではなく、「よみ人しらず」と明記される和歌がある。「作者未詳」と記される場合は個人の連想をともなう不明確を表わすが、「よみ人しらず」という表記は『古今集』からの勅撰集中心に散見する伝承性の明記である。歳月をこえて広く支持され伝えられてきたことを謳う和歌は、共感を呼び込む有効なことばと成り得る。ひとつの出発点としてこのよみ人しらずの歌に着目し、物語世界の様相をいま一度考えてみたい。

二 『源氏物語』と勅撰集よみ人しらず歌

『源氏物語』の引歌について、よみ人しらず歌という観点から、あらためて引用状況を概観してみる。まずはおおよその傾向を知るために、本文注釈作業からの選定を経た完訳日本の古典に指摘される引歌を基礎資料とし、一覽を作成してみる。

巻	総数	勅撰	よみ人 しらず歌	出典内訳
桐壺	15	8	3	古今・恋三・六四七、恋五・八〇六、拾遺・恋五・九二九
帚木	15	8	3	古今・秋上・二二三、秋下・二八七、恋五・八一、雑体・一〇二五、一〇六〇、後撰・秋下・四〇七、新古今・恋二・七三三
空蟬	5	2	1	拾遺・恋二・七二七
夕顔	23	2	1	古今・秋上・一八四、恋三・六三一、恋四・七〇一、雑下・九八七、雑体・一〇〇七、雑体・一〇六一、拾遺・恋四・八九四、恋四・九〇〇
若紫	23	10	5	古今・恋一・四九三、五四五、恋四・七三二、雑上・八六七、後撰・恋五・九〇一
末摘花	16	8	3	古今・雑下・九七〇、雑体・一〇三七、拾遺・恋三・七九八
紅葉賀	26	13	7	古今・恋三・一一〇八、恋四・六八三、雑上・八九二、後撰・春中・六六、夏・一九九、拾遺・恋四・八六四、新勅撰・恋四・九三九
花宴	6	1	0	古今・恋一・五〇九、恋四・六九五、雑体・一〇四一、神遊びの歌・一〇八〇
葵	20	13	4	古今・恋四・七〇一、雑下・九五二、九八二、雑体・一〇四〇、後撰・冬・四五八、雑四・一二六一、新古今・恋四・一二六〇
賢木	23	17	7	古今・夏・一三九
花散里	4	1	1	古今・雑下・九五二、秋上・一八四、恋一・五〇八、後撰・雑二・一一八九、拾遺・恋四・九〇〇、新勅撰・恋五・九四七
須磨	35	26	6	古今・恋一・五〇三、恋四・六七七、雑上・八六五、雑体・一〇二五
明石	24	13	4	古今・騎旅・四〇九、恋三・六三一、雑上・九一三、後撰・春中・六四、拾遺・賀・二九九、哀傷・一三三九
滯標	13	11	6	古今・秋上・二〇〇、雑下・九四八、雑下・九七五、九八二
蓬生	15	11	4	
関屋	1	1	0	古今・騎旅・四〇九（二回）、後撰・秋上・二三四
松風	18	13	3	古今・秋上・二四六、恋一・五三〇、五四六、拾遺・恋二・七六一、恋五・九八五、雑下・五二一
薄雲	19	14	6	古今・恋三・一一〇八、雑上・八六七、雑体・一〇二五
朝顔	17	9	3	古今・夏・一三九、雑下・九三三
少女	13	6	2	古今・恋一・五四六、雑体・一〇〇九、恋三・一一〇八
玉鬘	13	6	3	拾遺・春・四〇
初音	19	13	1	古今・春下・一二五、夏・一三九、恋一・四九八、雑上・八六七
胡蝶	12	7	4	
蛩	8	5	0	
常夏	19	9	4	古今・恋一・五〇六、恋四・六九九、後撰・恋二・六〇九、拾遺・恋四・八九七
篝火	3	3	0	古今・秋上・一七一、恋一・五〇〇
野分	7	3	2	古今・恋四・六九四、後撰・春中・六四、秋上・二二〇
行幸	3	2	2	古今・恋一・五一五、恋三・六七四

藤袴	真木柱	梅枝	藤裏葉	若菜上	若菜下	柏木	横笛	鈴虫	夕霧	御法	幻	匂兵部卿	紅梅	竹河	橋姫	椎本	総角	早蕨	宿木	東屋	浮舟	蜻蛉	手習	夢浮橋
7	15	10	15	41	31	25	11	6	37	11	22	11	3	19	16	28	63	23	46	26	34	16	22	0
3	8	7	10	25	18	20	6	5	23	11	16	7	3	14	12	21	40	17	13	20	10	17	0	
2	6	4	3	7	7	6	3	0	11	1	5	3	0	4	3	5	18	5	8	9	4	4	5	
後撰・雑二・一一七八、新古今・恋一・一〇五二	古今・春上・二八、恋一・五四六、恋四・七〇八、七三二、後撰・冬・四八二、恋三・七二二	古今・春上・五、三五、恋四・七二二、拾遺・恋四・八九三	古今・雑上・八六七、後撰・春下・一〇〇、雑二・一一八九	古今・春上・三三、秋上・二二〇、恋一・五三五、恋三・六三二、六七四、七二六、拾遺・物名・三八二	古今・春下・七〇、夏・二三九、秋上・一八四、恋五・七七二、雑上・八七六、八九六、拾遺・恋三・八四四	古今・秋上・二二二、恋一・五二七、五四四、雑上・九〇七、後撰・雑二・二八九、拾遺・恋一・六六五	古今・春下・九七、秋上・一九一、恋一・四八三	古今・秋上・二〇四（二回）、恋一・四八八、五〇五、恋二・五八二、恋四・六九五、七〇八、雑体・一〇六一、後撰・恋三・七二六、拾遺・恋二・七四九、雑恋・一二五一	拾遺・恋一・六九四	古今・夏・一三九、恋一・五三五、恋五・八〇六、後撰・春中・六四、夏・一八六	古今・春上・三三、三五、春下・七一	古今・春上・三三、後撰・春中・六四、拾遺・雑上・五〇七、新古今・恋一・一〇五二	古今・恋四・六八九、雑下・九三五、哀傷・八五八	古今・春上・二八、恋五・八二五、雑下・九三五、神遊びの歌・一〇八〇、後撰・秋上・二五一	古今・秋上・一七五、恋一・四八三、恋一・五〇九、五三五、恋三・六三一、六七四、恋四・六八九、七一、七三二、恋五・八〇六、雑上・九〇四、雑下・九五二、雑体・一〇二五、後撰・秋上・二三八、冬・四六九、拾遺・恋四・八九七、哀傷・一三二九、新千載・冬・五九九	古今・春上・三三、夏・一三九、雑下・九六〇、九八一、後撰・恋一・六〇九	古今・春上・三二、秋下・二八七、恋三・六三一、離別・三七七、雑上・八七八（二回）、雑下・九三四、九三五、九四四、九五、後撰・恋一・五六四、恋二・六八五、拾遺・恋二・七四九	古今・恋一・四八八、恋一・五三五、雑上・八六七、雑下・九四八、九五二、後撰・恋二・六六三、拾遺・雑上・五〇六、物名・四一三	古今・春下・一一一、恋一・四八八、恋三・六三七、一一〇八、恋四・六八九、七〇八、恋五・八二五、拾遺・雑恋・一二七、新勅撰・恋二・七三四	古今・夏・一三九、哀傷・八五五、雑体・一〇六一、一〇六八	古今・春上・三三、恋四・六九五、雑体・一〇〇九、拾遺・雑上・五〇六、恋三・八二三			

*同一巻に同じ和歌が引かれる場合はその都度一回と数え、総数を（ ）内に示した。

同じ歌が引かれる場合も引用一回を一首として数えると、全九百五十九首中、よみ人しらず歌は二百三十一首にのぼる。そのうち、『古今集』は百六十四首、『後撰集』二十九首、『拾遺集』二十九首である。やはり大半が三代集であり、『古今集』が圧倒的に多く、『後撰集』『拾遺集』はほぼ同数である。

前述のように、『源氏物語』には『古今六帖』歌や『万葉集』の作者不明歌、『伊勢物語』所収歌や歌語り、さらには古注釈に記される出典未詳歌も多く取りこむ作品であり、催馬楽・風俗歌など歌謡も多く用いられている。あらためて考えてみると、『源氏物語』は伝承性の強い和歌を積極的にとりこむ作品である。そのなかでも、勅撰集に入集されるよみ人しらず歌は宮廷社会に広く浸透して享受され、特定の作者から解放されて「よみ人しらず」と明記される和歌である。物語世界は、人口に膾炙した和歌の伝承性ばかりではなく普遍性をも積極的に掘いあげて物語世界を構築している。

巻ごとにもてみると、初音巻のように一首のみの場合もあるが、勅撰集からの引歌の半数近くをよみ人しらず歌が占める場合は多い。前述の歌語りとの関わりが指摘される夕顔巻にはよみ人しらず歌も多く、和歌との密接な関連が指摘されている夕霧巻12の落葉宮や夕霧の物語、宇治の物語では浮舟巻などに多い。一首の引用回数としてみると、最多は『古今集』夏の歌で、鈴木氏が指摘されている三代集の引歌上位の歌と重なる。いま、引用頻度の高い順にあげてみる。(同一歌の複数回引用は各一回と数える)

七回

さつきまつ花橘のかをかげば昔の人の袖の香ぞする

『古今集』 夏・一三九

五回

こりずまに又もなきなはたちぬべし人にくからぬ世にしすまへば
『古今集』 恋三・六三一

紫のひととゆゑにむさしのの草はみながらあはれとぞ見る

『古今集』 雑上・八六七

いかならむ巖の中にすまばかは世のうき事のきこえごらむ

『古今集』 雑下・九五二

ありぬやと心みがてらあひ見ねばたはぶれにくきまでぞこひしき

『古今集』 雑体・一〇二五

四回

色よりもかこそあはれとおもほゆれたが袖ふれしやどの梅ぞも

『古今集』 春上・三三三

とぶとりのこゑもきこえぬ奥山のふかき心を人はしらなむ

『古今集』 恋一・五三五

おほぞらにおほふばかりの袖もがな春さく花を風にまかせじ

『後撰集』 春中・六四

これらに続いて三回を数えるのは、『古今集』十七首、『後撰集』一首の計十八首あり、その内訳は『古今集』が、春上一首(二二八)、

秋上・二首(一八四、二〇四)、恋一・二首(四八八、五四六)、恋

三・二首(一一〇八、六七四)、恋四・三首(六九五、七〇

八、七三三)、恋五・一首(八〇六)、雑上・一首(八七八)、雑下・

一首(九三五)、雑体・俳諧歌・二首(一〇四一、一〇六一)、雑体・

旋頭歌・一首(一〇〇九)、騎旅・一首(四〇九)、『後撰集』雑

二・一首(一一八九)である。やはり恋や雑の歌が多い。引用回数

最多の『古今集』一三九番歌は、よみ人しらず歌由来の歌語「橘」

として、花散里巻をはじめとして用いられる。また、『古今集』三三番歌は第三部のみに四回引かれ、光源氏亡きあとの闇の世界が視覚より嗅覚に訴える香を基調とすることを表す。よみ人しらず歌のなかには、宇治十帖の世界にのみ繰り返し引かれる和歌もある。

雁のくる峰の朝霧はれずのみ思ひつきせぬ世の中のうさ

『古今集』 雑下・九三五

九三五番歌は橋姫巻以降に三回引かれ、霧が重要な景物となる宇治の物語世界を際だてている。ともに、第三部の物語世界を構築するためのイメージ形成に深く関わっている。

さらには、行幸巻で末摘花の興ざめな和歌へ「からころも」を繰り返して応じる光源氏の珍妙な返歌に『古今集』よみ人しらず五一五番歌がふまえられている例もある。よみ人しらず歌はそれぞれの場合に深く関わり、『源氏物語』が特定の個人とは一線を画する伝承和歌を有効に掘りあげていく様相が浮かび上がってくる。

三 紫のゆかりと「紫のひとつも」

よみ人しらず歌と物語世界を考える一例として、ここでは若紫巻を中心に『古今集』八六七番歌の場合をいま一度とりあげてみたい。八六七番歌は引用頻度が高く、若紫巻以外にも朝顔、胡蝶、藤裏葉、東屋巻をはじめ複数の巻々で引歌が指摘されるが、とりわけ、藤壺ゆかりの若紫登場の場面と密接に関わる和歌として注目を集めてきた。

ある人のいはく、この歌はさきのおほいまうち君のなり

紫のひとつもゆゑにむさしのの草はみながらあはれとぞ見る

『古今集』・雑上・八六七

一首は、紫草の一本ゆえに武蔵野の草はみなすべいとおしく見るといふ歌意。北山で垣間見た若紫に心惹かれる光源氏が、藤壺への思慕から「あながちなるゆかり」と強引に縁者の若紫を手に入れたいと願って詠んだ歌に指摘される。垣間見場面で「初草」「若草」を詠みこんだ唱和があり、その尼君詠「生ひ立たむありかも知らぬ若草をおくらす露ぞ消えんそらなき」の五句を想起して、光源氏が詠む和歌に八六七番歌がふまえられている。

手に摘みていつしかも見む紫のねにかよひける野辺の若草

若紫 二二九九頁

「紫のね」は貴重な染料となる紫草の根、物語では藤壺の縁である若紫を表す。「紫のねにかよひける」がよみ人知らず歌の「紫のひとつもとゆゑに」に重なる趣向である。また二条院に引き取った紫上に手習いを見せるくだりでは、「武蔵野といへばかこたれぬ」と紫の紙に書いている光源氏と紫上の歌にも関わる。

ねは見ねどあはれとぞ思ふ武蔵野の露わけわぶる草のゆかり

若紫 二五八―二五九頁

かこつべきゆゑを知らねばおぼつかないかなる草のゆかりなるらん

若紫 二五九頁

光源氏は藤壺への思慕ゆえに垣間見た少女の面ざしに心惹かれ、素性が明らかにされたのち、父兵部卿官も引き合ひに出されて「いかでかの一族におぼえたまふらむ、ひとつ后腹なればにや」(二二七頁)と一族の血筋にもふれられる。ここでは血縁が際だてられる。藤壺思慕から紫上恋慕へ、禁忌の恋ゆえの若紫登場という設定が、よみ人しらず歌のことばの力に支えられている。

垣間見場面の「初草」「若草」には『伊勢物語』四十九段との関連を指摘する見方もあり、これは人口に膾炙した和歌との関連が注目を集めるくだりである。この八六七番歌は「よみ人しらず」と明記されて伝承性の強さが示されるが、それは当該歌一首のみならず、『古今集』以前からの和歌の流れのうえにある。

「武蔵野」「紫草」が詠まれる歌は、はやく『万葉集』巻十四東歌に散見する。ただし、東歌では「武蔵野」と結びつく花は「うけらが花」であり、「紫草」と「根」を結びつけて詠む和歌に「武蔵野」はみられない。

むらさきはねをかもをふるひとのこのうらがなしけをねをへ
なくに 『万葉集』巻十四 三五二・三五〇〇

「むらさき(紫草)」と「ね(根)」が詠みこまれる一首には、すでに恋の連想がある。こうした発想をうけて「武蔵野」が「紫草」と結びつくのが、『古今集』八六七番歌である。

「紫」じたい、和歌には頻出のことばであり、この「紫草」をはじめ、色名の紫のほか、めでたい雲を表す「紫雲」や「紫の椶櫚の衣」などの歌語がある。「紫のひとつ」という表現は、『古今集』以前からあり、「菊」と結びついて詠まれている。

なにしおへばはなさへにほふむらさきのひとつとぎくにおける
はつしも 『寛平御時菊合』むらさいののきく 三

題の「むらさいののきく」を『平安朝歌合大成』では「紫野の菊」とする。『寛平御時菊合』は、『古今集』に入集する四首から菅原道真・紀友則、素性法師の三名の作者が知られ、当該和歌の作者は不明であるが、「むらさきのひとつとぎく」として詠まれている。

これが「武蔵野」とともに詠まれる和歌が『兼輔集』に確認できる。

こないしのかみのみすたまひし時、ふちつばにてきくの賀
みかどのせさせたまひけるに

紫の一本ぎくはよろづよを武蔵野にこそ頼むべらなれ

『兼輔集』 五八

『兼輔集』の成立は未詳であるが、『大和物語』や『後撰集』との共通歌が多いことが指摘されており、『古今集』からそれほど下らない時期であると推定される。のちの『夫木集』(五九三二)にも採られ、八六七番歌とともに「むらさきのひとつ」と「菊を結びつける和歌が後世にも散見する。

平安時代初期にみられる「むらさきのひとつとぎく」という表現が継承される一方で、『古今集』では、東歌からの流れを汲み「紫草」とその「根」の連想に「武蔵野」が結びつく「むらさきのひとつとぎく」が「よみ人しらず」と明記されて定着し、歌集の権威とともに広く享受されていく。それが『古今六帖』には「むらさき」と題する八首の歌群の最初に四句「くさはなべても」で入集し、その「むらさき」歌群の末尾には八六七番歌の類想歌も収められる。

しらねどもむさしのとていへばかこたれぬよしやさこそはむらさ
きのゆゑ 『古今六帖』第五 むらさき 三五〇七

個人名から解放され「よみ人しらず」と謳う伝承歌の浸透が、『古今六帖』歌に反映されるような詠みくちの拡がりを生む。さらに、記名の類想歌も勅撰集と私家集にみられる。

紫の色にはさくなむさしのの草のゆかりと人もこそ見れ

『拾遺集』物名 三六〇 如覚法師

とのもりのかみにむらさきこひたれば、おこすとして

かこつべき人もなきよにむさしのわかむらさきをなにくみす
らむ

御かへし

したにのみなげくをしらでむらさきのねずりのころもむつまし
きゆゑ

また人に、なにのをりにか

『実方集』一六九・一七〇

むらさきのいろにいでけるはなをみて人はしのぶとつゆぞつけ
ける

かへし

しらつゆのむすぶばかりにはなをみてこはたがかこつむらさき
のゆゑ

『実方集』一七一・一七二

『拾遺集』歌は如覚法師すなわち藤原高光詠、『実方集』の「むさ
しのわかむらさき」は『古今集』よみ人しらず歌と通う。『万葉集』
東歌以来の発想が『古今集』のよみ人しらず歌によって定着し、新
たな類想歌を生みだしていく様相がうかがえる。

八六七番歌は、脈々と受け継がれる伝承の力に裏打ちされている。
八六七番歌を引くことにより、複数の類想歌も物語と無縁ではあり
得ない。実際、『古今六帖』歌の「かこたれぬ」は手習いの「かこ
たれぬ」や紫上の「かこつべき」に重なる。八六七番歌をとりまく
複数の伝承歌がおのずとひとつの磁場を形成し、物語の主要な紫の
ゆかりの女性たちの設定は、そのなかにある。

ふたたび物語世界に立ち戻ると、若紫巻周辺の藤壺思慕の乱れる
心情には、しばしばよみ人しらずの歌が関わっていることに気づく。
いま、それらの物語本文の一端と和歌を並べてあげてみる。

*秋にもなりぬ。人やりならず心づくしに思し乱れることどもあ

りて、大殿には絶え間おきつつ、恨めしくのみ思ひきこえたま
へり。
夕顔 一四六頁

このまよりもりくる月の影見れば心づくしの秋はきにけり

『古今集』秋上・一八四

*君は心地もいとなやましきに、雨すこしうちそそき、山風ひや
やかに吹きたるに、滝のよどみもまさりて音高う聞こゆ。……
略…… まして思しめぐらすこと多くて、まどろまれたまはず。

若紫 二一五頁

たきつせのなかにもよどはありてふをなどわがこひのふちせと
もなき

『古今集』恋一・四九三

*いはけなき鶴の一声聞きしより葦間になづむ舟ぞえならぬ同じ
人にや」とことさら幼く書きなしたまへるも、いみじうをかし
げなれば、やがて御手本に、と人々聞こゆ。

若紫 二三八頁

ほり江こぐたななしを舟こぎかへりおなじ人にやこひわたりな
む

『古今集』恋四・七三二

*よそへつつ見るに心は慰さまで露けさまざるなでしこの花

紅葉賀 三三〇頁

わがやどのかきねにうゑしなでしこは花にさかなんよそへつつ
見む

『後撰集』夏・一九九

*……略……こもかしこもおぼつかなさの嘆きを重ねたまふ報

いにや、なほ我につれなき人の御心を尽させずのみ思し嘆く。

葵 一七頁

われを思ふ人をおもはぬむくにやわが思ふ人の我をおもはぬ

『古今集』 雑体・一〇四一

*もの心細く、なぞや、世に経ればうさこそまされと思し立つには、この女君のいとらうたげにてあはれにうち頼みきこえたまへるをふり棄てむこといとかたし。

賢木 一 一三頁

世にふればうさこそまされみよしのいはのかけみちふみならしてむ

『古今集』 雑下・九五一

若紫巻周辺の巻々で、光源氏の藤壺思慕とそれゆえの報われぬ心情を表すなかに、よみ人しらず歌のことが散見する。人口に膾炙するのみならず「よみ人しらず」と特定の個人との乖離を謳う和歌のことは浸透力によって、光源氏の横車とも言える状況や不条理な心情が表されている。物語は、こうした「よみ人しらず」歌のこ

とばの力を有効に掬いあげて展開されていく。

四 光源氏とよみ人知らず歌

よみ人しらず歌は、光源氏との心情描写とも深く関わっている。若菜下巻の朱雀院五十賀の有名な光源氏のせりふも、よみ人知らず歌をふまえた表現であった。

*さかさまに行かぬ年月よ。老は、えのがれぬわざなり

若菜下 二八〇頁

さかさまに年もゆかなむとりもあへずすぐるよはひやともにかへると

『古今集』 雑上 八九六

これは『古今集』八九三―八九九番歌の老いを詠んだ一連のよみ人しらず歌群のなかの一首である。『俊頼髓脳』に「あさましく老いたる翁の、七人みなみて、おのおの詠める歌」とあり、新旧の日本古典文学全集『俊頼髓脳』の注では「俊頼は七叟尚齒会の詠と考えていたようだ」として、老人七人により詩歌を作る遊興の詠歌と解釈される場所である。この歌群が七叟尚齒会の詠歌かどうかについては検討を要するが、そうみなせる詠みくちとしてあることは見逃せず、これが伝承の歌群の一首であることに注目される。理想的な王者としてある人間光源氏の内面に光が当てられた時、物語はよみ人知らず歌を用いている。

紫上の場合、藤壺の縁者という設定そのものがよみ人しらず歌の発想に枠取られていたが、光源氏の場合は紫上を失つて悲嘆にくれる心情描写に散見する。あわせて、それを列挙しておきたい。

*今日やとのみ、わが身も心づかひせられたまふをり多かるを、はかなくてつもりにけるも、夢の心地のみす。

御法 五一八頁

わびつつも昨日ばかりはすぐしてきけふやわが身のかぎりなるらん

『拾遺集』・恋一・六九四

*春深くなりゆくまに、御前のありさまいにしへに変わぬを、めでたまふ方にはあらねど、静心なく、何ごとにつけても胸いたう思さるれば、おほかたこの世の外のやうに鳥の音も聞こえざらむ山の末ゆかしうのいにとどなりまさりたまふ。

幻 五二九頁

とぶとりのこゑもきこえぬ奥山のふかき心を人はしらなむ

*花橘の月影にいときはやかに見ゆるかをりも、追風なつかしければ、「千代をならせる声」もせなんと待たるほどに、

御法 五三九頁

色かへぬ花橘に郭公ちよをならせるこゑきこゆなり

『後撰集』夏・一八六

*今まで経にける月日よと思すにも、あきれて明かし暮らしたまふ。

幻 五四三〜五四四頁

身をうしと思ふにきえぬものなればかくてもへぬるよにこそありけれ

『古今集』恋五・八〇六

柏木への皮肉が我が身に向かう光源氏の苦衷や紫上哀傷の悲嘆に、よみ人しらず歌が関わる。物語は、歳月を生きる人間の生涯の思いに個別の作者との乖離を謳う伝承和歌のことはを用い、読者の共感と呼び込む。

物語と和歌それぞれの力の交差が、物語世界に透かし見えてくる。これを序として、『源氏物語』に結実するひとつの文化交流のありようを、引き続き考察する機会を期したい。

注(1) 『源氏物語』と和歌に関する研究は数多く研究史の展望も種々重ねられて

いるが、この視座にたつ研究書として、「歌ことば」の概念による

小町谷照彦『源氏物語の歌ことば表現』（東京大学出版会 一九八四年）

同『王朝文学の歌ことば表現』（若草書房 一九九七年）、歌語りを重視

する後藤祥子『源氏物語の史的空間』（東京大学出版会 一九八六年）、

広く古代和歌を見据える鈴木日出男『古代和歌史論』（東京大学出版会

一九九〇年）、清水婦久子『源氏物語の風景と和歌』（和泉書院

一九九七年）など。なお、引歌については、かつて拙稿「源氏物語の引

歌——夕霧卷「霧の籬」の場合——」（『日本女子大学文学部紀要』（平成

六年三月）でふれたことがある。

(2) 本居宣長「玉の小櫛」は「引歌とは、古き歌によりていへる詞にて、かならず其歌によらでは、きこえぬ所也」（『本居宣長全集』筑摩書房）とする。

(3) 玉上琢彌『源氏物語の引き歌』（中央公論社 一九五五年）。

(4) 池田亀鑑『源氏物語事典』（東京堂 一九六〇年）。

(5) 伊井春樹『源氏物語引歌索引』（笠間書院 一九七七年）

(6) 角川古典大観 CD-ROM『源氏物語』。

(7) 『完訳 日本の古典 源氏物語』（小学館）第十巻所収。

(8) 小町谷照彦『王朝の歌ことば表現』（東京大学出版会 一九九二年）。

(9) 鈴木宏子「三代集と源氏物語——引歌を中心として」（『源氏物語と和歌を学ぶ人のために』（世界思想社 二〇〇七年）。

(10) 注(1)後藤祥子『源氏物語の史的空間』（東京大学出版会 一九八六年）の第三章「歌語りの世界」。

(11) 催馬楽については拙著『源氏物語の宮廷文化——後宮・雅楽・物語世界』（笠間書院 二〇〇九年）でふれた。

(12) 注(10)文献参照。

(13) 三谷邦明「藤壺事件の表現構造——若紫の方法あるいは（前本文）としての伊勢物語——」（『物語文学の方法Ⅱ』（有精堂 一九八九年）。新編日本文学全集本は四十九段を投影するという注を付し、新日本古典文学大系は直接の関係は認めがたいとする。

(14) こひしけばそでもふらむをむさしのうけらがはなのいろにつなゆめ

『万葉集』巻十四 三三九三・三三七六

わがせこをあどかもいはむむさしののうけらがはなのときなきものを

『万葉集』同 三三九七・三三七九

(15) 萩谷朴『平安朝歌合大成』（同朋舎出版 一九九五年）。

『新編国歌大観』の「兼輔集解題」。

(17) これについてはかつて拙稿「源氏物語」のことばと現代——「さか

さまにゆかぬ年月よ」から——『日本文学』（二〇〇二年五月）でふれたことがある。

『源氏物語』の本文引用は新編日本古典文学全集（小学館）による。和歌の引用ならびに歌番号は『新編国歌大観』（角川書店）による。

受贈雑誌（一）

愛知教育大学大学院国語研究

愛知教育大学国語教室

愛知県立大学説林

愛知県立大学国文学会

愛知淑徳大学国語国文

愛知淑徳大学国文学会

愛知大学国文学

愛知大学国文学会

青須我波良

帝塚山大学日本文学会

青山語文

青山学院大学日本文学会

歌子

実践女子短期大学日本語コミュ

ニケーション学科

宇大国語論究

宇都宮大学国語教育学会

愛媛国文研究

愛媛県高等学校教育研究会国語部会

愛媛国文と教育

愛媛大学教育学部国語国文学会

王朝細流抄

安田女子大学大学院古代中世文学研究会

大阪大谷国文

大阪大谷大学日本語日本文学会

大阪大谷大学大学院日本文学論

大阪大谷大学大学院文学研究科

叢

大妻国文

大妻女子大学国文学会

大妻女子大学紀要

大妻女子大学

大妻女子大学大学院文学研究科

大妻女子大学大学院文学研究科

論集